

慶應義塾大学ビジネス・スクール

営業マン秋山清治の迷い

5

現在

2001年4月下旬、連休をひかえた木曜日の夜、大手門火災海上保険の秋山清治は疲労感を意識しつつ残業していた。彼は首都圏第2本部、丸の内支社の支社長代理であった。入社11年目の秋山は昨年7月の定期異動時に課長代理職へ昇進し、丸の内支社に異動となっていた。3度目の異動であった。

10

時計はすでに夜の11時を回っていた。しかし明朝一番で営業開発部に提出しなければならない書類はまだ半分もできていない。「今日も娘の起きているうちに帰宅できなかった。というより今週はまだ一度も起きている顔を見てないんだ。」秋山は心の中でつぶやいた。

15

それにしてもこの心の重さと言い、迷いと言い、普段と違うようであった。たしかに今週は色々あった。月曜は支社で恒例の年度末の打ち上げ会。火曜は労働組合の役員会。昨日は同期と飲んだ。3日連続で午前様であった。しかし飲み過ぎや寝不足が原因ではなさそうだ。この程度のことは入社以来ずっと続いている。名古屋で豊世自動車系のディーラーを担当していた時など、3年間ほぼ毎晩アルコール漬けであった。

20

しかしこの3日間の出来事は、別の意味で秋山に深く考えさせていた。支社の年度末打ち上げ会では、支社長の不用意な一言で、日頃から仕事に不満のあった若手がキレてしまった。組合の会議では急激に増加している若手組合員の退職が問題になった。そして昨日の同期の集まり。一人は3年前に退職して米国有名ビジネススクールに留学してMBAをとり、現在は大手外資系メーカー日本法人のマネジャーとなっている。もう一人は東大出身で、新人のころから切れ者で通っていた。しかし昨年の定期異動時に、第一選抜の課長代理職昇進はなかった。

25

秋山は考え込んでいた。ここ数年、大手門火災も経営環境の変化の波にさらされている。社員はみな頑張っているが、どこかが違う、何かがずれている、と彼は感じていた。とくに先月の年

本ケースはクラス討議の資料として作成されたものであり、経営の巧拙を例示するものではない。慶應義塾大学ビジネス・スクール教授高木晴夫の指導により、同修士課程23期生北垣武文が作成した。(2001年)

30

本ケースは慶應義塾大学ビジネス・スクールが出版するものであり、複製等についての問い合わせ先は慶應義塾大学ビジネス・スクール(〒223-8523 神奈川県横浜市港北区日吉本町2丁目1番1号、電話045-564-2444、e-mail:case@kbs.keio.ac.jp)。また、注文は<http://www.kbs.keio.ac.jp/> 慶應義塾大学ビジネス・スクールの許可を得ずに、いかなる部分の複製、検索システムへの取り込み、スプレッドシートでの利用、またいかなる方法(電子的、機械的、写真複写、録音・録画、その他種類を問わない)による伝送も、これを禁ずる。